

も っ と 知 ろ う よ ! オ キ ナ ワ !

第20回 若手会員による『沖縄訪問』報告

会員 内村 涼子 (65 期)

1 沖縄訪問企画の立案

去る2018年11月9日から11日まで、2泊3日の旅程で、当会の登録15年目までの若手会員30名ほどで沖縄を訪問しました。もともとここ数年、若手弁護士を中心に沖縄の歴史や現状の勉強会（基地や沖縄の歴史に関する映画鑑賞、基地訴訟の代理人弁護士による講演等）を不定期で開催していたところ、沖縄に行ったことがない会員から、現状を肌で感じてみたいと声が上がったことから企画したものでした。

当初は十数名程度での実施となるかと思っていたところ、これまで勉強会に参加したことのない若手会員からも参加したいとの希望が寄せられ、多数参加してくれることとなったことから、予想外の大人数となり、若手会員の沖縄の現状への関心の高さがうかがえました。

2 沖縄到着初日

～沖縄戦の現実を知る

沖縄到着初日は、平和ガイドの横田眞理子氏のガイドのもと、まず県立公文書館にてアメリカ海兵隊撮影の沖縄戦の動画（ニュース映画）を視聴しました。これは沖縄県がアメリカの情報公開制度を利用して手に入れた動画であるとのこと、大変貴重なものであり、また目を覆いたくなるシーンが散見されるものでした。参加した会員からは「沖縄戦がここまでとは思っていなかった」「アメリカ軍兵士が、日本軍か民間人か、誰が隠れているかわからないガマ（洞窟）に向かって、容赦なく火炎放射をしたり、手りゅう弾を投げ込んでいたりして、正直見ていて気持ち悪くなった」などの感想が聞かれました。

その後、平和祈念公園では資料館を見学し、また平和の礎では実際に刻銘されている方の名前を指さしながら平和ガイドさんが具体的なエピソードを話して

くださいました。

また、その後、ひめゆりの塔も訪れ、沖縄戦の被害の大きさ、戦没者の数だけでなく、中学生までもが看護師として従軍し、そして亡くなっていった現実についても実感することとなりました。



沖縄弁護士との意見交換

3 沖縄到着初日

～沖縄の弁護士との意見交換

夕方からは、那覇市内にて普天間基地爆音訴訟、辺野古基地関連訴訟、高江ヘリパッド関連訴訟など、沖縄の数々の基地関連訴訟の代理人を務める加藤裕弁護士（前日弁連副会長・沖縄弁護士会）を始めとする十数名の沖縄弁護士会所属の弁護士との意見交換と、懇親会が行われました。訴訟の現状や今後の展望などについて熱意をもってお話いただき、わずか二十数名の弁護士がこれらの訴訟を中心的に担っているという現実には驚かされました。また、常日頃から東京にいて何ができるだろうか、と歯がゆく思っていたのですが、沖縄の弁護士からは「このように東京から関心を持ってきてくれるということだけで、とても勇気づけられる」という話をしていただき、また参加した会員からも「沖縄でしかできないこともあれば、東京でこそできることもあるのではないかと思った」との感想が寄せられ、今後参加した会員一人一人が問題意識をもって行動していくことが、沖縄の現状を

変えるにはあまりに微力ではあっても、それでも何らかの力になるのではないかと感じました。

4 沖縄訪問2日目 ～普天間基地、嘉手納基地など

翌日は、普天間基地を見下ろす嘉数高台を手始めに、嘉手納基地、キャンプハンセンなどの脇を通過しつつキャンプシュワブがあり、現在基地建設が進む辺野古まで北上しました。

嘉数高台からは普天間基地が一望でき、オスプレイが駐機している様子が見てとれました。残念ながらプロペラが回っている際の騒音の大きさを感ずることや、飛び立つ際の空中姿勢の不安定な様子を見ることはできませんでしたが、住宅街との距離の近さなどを実感することはできました。

その後、バスで、2004年に米軍ヘリが墜落した沖縄国際大学や、2017年12月に米軍ヘリの部品が落下した緑ヶ丘保育園付近も通過し、いかに基地や、基地があることによる現実の危険が日常と隣り合わせにあるのかを実感しました。

また嘉手納基地を見下ろせる「道の駅かでな」では、戦闘機の離発着は見られませんでした、その広大さを知り、沖縄本島の中心部分が基地になっていることで、東西の行き来ができない実情なども知るようになりました。

参加した会員からは「日常生活のこれほど近くで航空機が飛行している異常さを身をもって感じた」との感想が聞かれました。



辺野古テント

5 沖縄訪問2日目 ～辺野古の現状

バスは北上を続け、キャンプシュワブへと到着しました。ゲート前のテントや、海側のテントでは、座り込みを続ける方たちから辺野古での活動の現状や、工事の進捗、今後の見通しなどについて説明を受け、護岸工事が終わった部分やオイルフェンスなどをフェンス越しに確認しました。土砂投入前の訪問でありましたが、青く透き通った海と、人工的な護岸の対比が埋め立ての残酷さを際立たせているように思いました。

帰京して、約1カ月後に土砂の投入が始まったこともあり、「これほどきれいな海を、埋め立てることが理解できなかった。ニュースで自分が目にしたきれいな海に土砂が投入されるのを見て衝撃を受けた」という会員もいました。

6 今後について

参加した多くの会員から、今後も勉強を続け、東京にいて何ができるか考えたい、というような感想が聞かれました。流動的な沖縄の現状を注視しながら、今後も定期的に沖縄の現状を知る勉強会を重ねていきたいと、改めて強く思った3日間でした。